

翻訳とは ④

解釈の地平

本号では翻訳について解釈学の視点から概観したい。解釈学は、古くからある学問で、特に神学や文献学との関係が深い。解釈学は元来、聖書をはじめとする文献の理解が目的であったが、19世紀にシュライエルマッハーにより体系化され、その後ハイデガーによって「全ての存在の根源的な意味を解明するための学問」へと次第に変化していった。

翻訳にはテキストの「理解」と「表現」という二つの側面がある。翻訳の過程においてはまず、起点言語のテキストの理解から解釈がなされ、そしてその解釈が目標言語で表現される。ハイデガーは解釈を「理解の一形態」とみなし、その関わりを存在論の中に見出した。存在が人間に要請しているものを認識するのが解釈であると。人間は理解という仕方では存在している。つまり、理解とは人間の存在様式そのものであると彼は考えた。翻訳を語るとき、原文を「どう理解するか」という命題は、必然的に「理解とはなにか」という問いが前提となる。

これに関してガダマーは、人間の世界経験はそれ自体が言語的世界経験であり、「事柄の理解は言語的な形態をとって起こらざるをえない。(中略)理解は事柄そのものが言語にいたるという仕方で行われる。」(ガダマー 2008:583)とし、言語は理解の普遍的な媒体であると同時に、理解の遂行様式でもあると指摘した。

彼によると、理解とはわれわれがすでに存在している意味世界の中で行われるものであり、それは固定的な視点からの対象的指定などではなく、自身が立脚する意味世界において自分自身を「適用」していくことである。したがって、人によってその「適用」には違いが生じる。彼は「そもそも理解するときには別の仕方では理解している。」(ガダマー 2008:465)と主張した。

それぞれがそれぞれの仕方では理解するので、その理解は全ての人において必ずしも一致するわけではない。この指摘は翻訳を受容と変容の視点から考察する上で重要な視座を提示するが、本号では問題提起に留めることにする。

さて、ここで暫定的に解釈を定義したい。解釈とは理解に依って何らかの応答をすることであり、すでに理解している事柄を、より展開、分節化し、言語的に表現することである。したがって、解釈の前提として理解そのものが必要不可欠となる。

翻訳者は起点言語のテキストから、意味するところを理解しつつ、その価値を照らし出して解釈する。その解釈とは翻訳者自身による応答、つまり理解の実践となる。

「翻訳はすでに解釈であり、それどころか翻訳とはつねに、翻訳者が自分に与えられている言葉に対して行っている解釈の完成と行うことができる。」(ガダマー 2012:680) このようにガダマーは翻訳を解釈であると明言した。

さらに彼は理解と解釈の言語性を、「作用史的意識の具体化」という視点からとらえた(ガダマー 2012:687)。翻訳者による解釈は、自身が立脚する空間的・時間的背景という伝統を背負いながら、その影響を多分に受けつつ自身を適用することによって初めて成り立つ。つまり、受容者としての翻訳者は自身の解釈において過去という伝統からの影響を免れ得ないのである。テキストの解釈において翻訳者は無色透明な存在としてで

はなく、先入見という先行判断を自身のカラーとして用いつつ、歴史的存在としての自己がテキストの価値を見出す。

個人がもつ先入見は、個人が下す判断よりもはるかにそのひとの存在の歴史的现实となっているのである。(ガダマー 2008:437)

つまり、理解の基盤となる歴史的存在としての自己とその先入見を超越し捨て去るということは、理解という行為そのものの放棄を意味するのである。

さらには、翻訳者は理解の実践としての解釈を目標言語においてテキスト化し表現する。そのテキストは受容者によって再び解釈される。したがって、翻訳者は、テキストを解釈する存在であると同時に、解釈される存在でもある。この双方向の対話を可能にするためには、空間的・時間的地平の隔たりの中で自身を常に修正する柔軟性が求められる。

翻訳は、解釈そのものであると同時に原文との対話であるとも言える。翻訳者は翻訳の過程で空間的・時間的地平を行き来し、常に対話を繰り返す。そして原文テキストの地平と自身の解釈という地平の融合をめざす。原文テキストの背後には、原著者の創作活動全般や表現領域、所属する時代の様々な観念的影響、さらには、原著者の全人格的な生の関わりが横たわっており、対話によってそれらが鏡に映るように顕現する。

その対話における翻訳者の営為としての解釈は、あくまでも既成の伝統的解釈という先行理解を前提としている。この相互作用ともいべき解釈学的循環は、原文テキスト全体を個別の部分から予見しつつ理解すると同時に、個別の部分全体から理解するという循環にも当てはまる。

それは言葉の持つ本質構造とも合致する。ガダマーは言葉を影響や作用という側面からとらえた。対話という意思疎通によって言葉の意義が証明されるように、翻訳も解釈的対話によってはじめて意味生起が可能となる。

翻訳者が直面するこの解釈的対話は、自己と他者という関係性において常に自身を開かれた存在として醸成する。その経験とまなざしは、言語間の相違のみならず、現実世界の様々な「隔たり」を克服しつつ、共同性を希求するための手がかりとなり得るかもしれない。世界に対する自己の解放は、同時に他者に対する解放でもあり、その過程で「わたしたち」という共同性が明確に認識されるようになる。人間の知の不断の生成は、相互了解という動的な展開をともなっていてゆくであろう。

文書ほど精神の純粹な痕跡と見なしうるものはないし、また文書ほど理解する精神に依存したものもない。文書を解読し、解釈する際には奇跡が起こるのである。つまりそこではなにか疎遠で死んでいたものが、まったく同時的なもの、なじみ深いものへと変容するのである。(ガダマー 1986:239)

奇跡とも呼べる解釈の地平融合の瞬間は、翻訳者にとっては、自身の内に生きている伝統という「過去」を認識しつつ、歴史的存在として対話の中に没主観的自己を了解させ、未来に向けて自己を解放する瞬間でもある。

[引用文献]

ハンス＝ゲオルク・ガダマー (饗田取他訳) 『真理と方法』Ⅰ～Ⅲ、法政大学出版局、1986、2008、2012年。